

米中激突 1

南洋の新冷戦

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

地 挿
図 画
安 安
達 田
裕 忠
章 幸

目次

プロローグ	11
第一章 パラダイス	18
第二章 危機一髪	41
第三章 S W A T	69
第四章 サーバー・センター	97
第五章 ブロガーの亡霊	126
第六章 ドルフィン	153
第七章 増援	180
第八章 クーデター	208

登場人物紹介

日本

防衛省

〔陸上自衛隊特殊作戦群隷下 極秘任務部隊〈サイレント・コア〉〕

おとなしせいじ
音無誠次 二佐。〈サイレント・コア〉創設者にして隊長。

土門小隊

どもんこうへい
土門康平 三佐。小隊長。学者肌のマイホーム・パパだが、頼れる司令塔としての顔も。

まちだはるお
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口苾太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

司馬小隊

しばひかる
司馬光 三佐。部隊の紅一点にして最強の小隊長。コードネーム：ターキッシュバン。

うるしばらたけとみ
漆原武富 曹長。司馬を補佐する。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。小隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

みずのともお
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。コードネーム：フィッシュ。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あねこうじさねあつ
姉小路実篤 士長。コードネーム：ボーンズ。

ゆらしんじ
由良慎司 士長。西方普連から引き抜かれた狙撃手。コードネーム：ニードル。

韓国

陸軍

カンチェハ
姜彩夏 大尉。韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。政府からの「ご褒美」でパルーマ島を訪れる。

ミクロネシア連邦

ジョージ・タナカ ミクロネシア連邦の大統領。

パルーマ島

ジョン・ファウ 警察署長。

[SWAT]

ジョーダン・サトウ 大尉。たたき上げの士官。警察署長からスカウトを受け、島に戻った。

マイク・ロンゲサップ 軍曹。ジョーダン・サトウの部下。

[チャイナ・パシフィック・トラベル社]

シアフエイ

夏 妃 チャイナ・パシフィック・トラベル社のガイド兼通訳。

中国

人民解放軍海軍

タンヨン コ

湯永革 大佐。

ソンシュイトン

宋 旭 東 少佐。

クウエンコン

顧 文 康 中尉。

チアホンウェン

賈 弘 文 大尉。

[エキシビジョン&ニューボーン・グループ (ENG)]

ユイスタンリイ

于 勝 利 ENGのオーナー。中国の長者番付の常連。

トランシェエユウ

鄧 学 友 パルーマ島ENG支社長。

[ENG私設軍隊]

モオクアンイン

莫 冠 英 少将。

チン ア ロン

金 亜 龍 中佐。

スンリイリイ

孫 麗 麗 少佐。八卦掌の有段者。

ホラファン

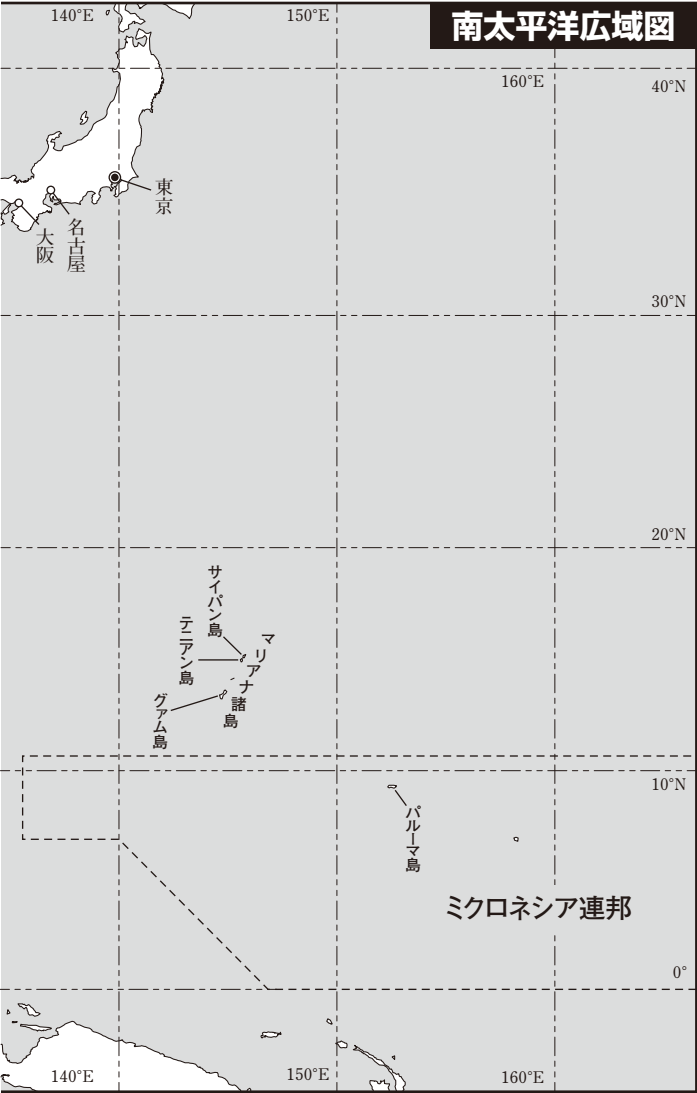
賀 帆 中尉。

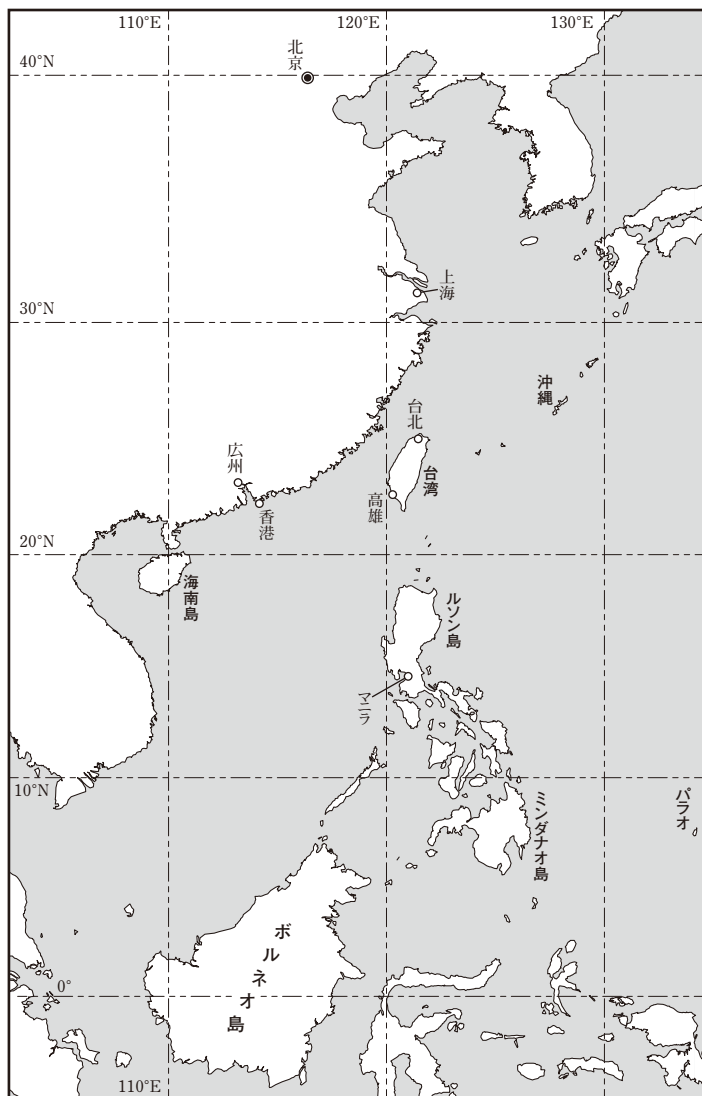
アメリカ

[ハワイ・ヒューマン・リソース研究所 (HHR I)]

チャールズ・キム HHR I 代表。

ケン・マグヌス HHR I 上級アナリスト。





米中激突1

南洋の新冷戦

プロローグ

インターネットが、この社会に革命をもたらしたという意見に異論は無かった。ここ半世紀でもっとも偉大なイノベーションは何か？と問われたら、ケン・マグヌスは、迷わずインターネットと答えるだろう。

だが、統計学で博士号を取った彼は、それをもたらした負の側面も良く知っていた。たとえば、全米で地方紙は壊滅した。

ネットで無料のニュースが読めるようになってから、もともと経済基盤が弱かった地方紙はバタバタと倒れていった。

この二〇年間で、全米で二〇〇を超える地方紙

が廃刊に追い込まれ、六万人もいた記者の三割が職を失った。

地方紙が廃刊して起こったことは、地方自治体の野放図な放漫財政と、地方議会の腐敗だった。

もし一紙でも地方紙が存在し、議会の動向をワツチして住民に報せていれば、まず起こらないような非常識な事態が随所で発生していた。そのうちいくらかは、自治体の職員や議員の報酬に関する出鱈目な支出としてたまに表面化するが、それを伝える肝心な新聞が存在しないというのが実情だった。

複雑化した現代では、何かが一方的に良い方向

に向かうということはまずない。囚人のジレンマや、ナッシュ均衡や、合成の誤謬^{ごびょう}といった、予期しないマイナスな結果を必ず伴う。

そして彼らが本当に必要としている肝心な情報は、ネットの外で、まるで伝言ゲームのように人から人へと伝わり、外部の人間が認知することなく情報は埋もれ、やがて人々の記憶からも消えてゆくのだ。

ハワイ・ホノルル、州政府庁舎に近いサウス・ベレタニア・ストリートに面する五階建てのオフィスビルの自室で、ケン・マグヌス博士は、今日も、対面情報という昔ながらの手法で取られた情報と格闘しながら、「世界は遠くなった……」とぼやいた。

彼の机の上には、現地行政府からファックス送られてきた一枚の事故報告書が載っていた。何の変哲もない自損事故の報告書だ。手書きで書き込ま

れた事故詳細部分は、ほんの一〇〇ワードも無い。事故現場のGPS座標すら無かった。

トヨタのピックアップ・トラックが、高さ七〇メートルの崖から転落し、三日後に発見されたが運転者はすでに死亡していたというもので、現場は緩やかなカーブ。スピードの出し過ぎか不注意が事故原因だろうという結論だった。

彼が契約していた生命保険に不審な点はなく、自損事故として通常処理とある。

マグヌスの机の向かいに掛けて、そのコピーを読んでいたハワイ・ヒューマン・リソース^R研究所代表のチャールズ・キムが、いささかうんざりした顔で「で、何が問題なんだね？」と視線を上げた。

「検死解剖^{かいぼう}すら無いんですよ？」

「そりゃまあ、あの島では医者はいても法医学者はいないだろうからな」

「昨日まで元気だった人間が、突然、崖からダイブして死ぬなんて……」

「ないとは言いい切れんよ。二〇年ほど前だったかな、大学時代の友人から、結婚式の招待状が届いた。そいつは、挙式の一週間前に、通勤途中、木立に突っ込んで死んだ。皆、どうしてと自問自答したが、答えは得られなかった。式を間近に控えた寝不足で居眠り運転したんだろうと警察は判断したらしいが、皆それで納得したわけじゃない。だが、人生はそんなものだ。不幸は突然訪れる」

マグヌスは、パソコンのモニター画面を一八〇度回して、上司に見えるようにした。画面には、トロピカルなデザインのブログ画面が映っていた。

「彼は、地元ではちょっとした有名人でした。トロピカル・アイランドのブロガーとして。普段は柔らかい記事を書いているが、時々、地元政府の怠慢や腐敗を告発して人気を得ていた」

「私も時々、読んでいたよ。いつ頃の記事だったかな、島を訪れる観光客の性癖せいへきに関して、国別に評価した記事は面白かった。いささか品位に欠けるところはあったがね」

「元は、島唯一の日刊紙の記者でした。取材もきっちりしていたし、最近は、そのコラムが有名なサイトに転載されることもあった」

「何が望みだ？ あんな小さな島に、センターの法医学チームを連れて乗り込み、墓を掘り返すかね？ 一応は独立国だから、住民感情は複雑だ。良い顔はされないぞ」

「それは望みません。敵を刺激するだけです」

「大げさだな……」

マグヌスはそれには答えず、引き出しを開けて人事ファイルを一冊取り出して差し出した。

「ご検討してもらえましたか？」

キム代表は、それを受け取ってパラパラと捲めくつ

た。ある若い女性に関する身上調査報告書だった。盗み撮りした写真に、金融口座情報、簡単な履歴書。だが、ペーパーの大部分は、両親に関する素行調査だった。

「変な経歴だな。予備役将校訓練課程^{R O T C}のコースを終了しているのに、カリフォルニア^{U C L A}大学ロサンゼルス校は中退しているし、任官もしていない」

「卒業目前で学費が尽きたことは明らかです。R O T C の学費援助は全額負担してくれるわけじゃありませんから。卒業できなかったから、任官もなしです。最近是不況で、R O T C からそのまま軍へという学生が多い。競争は激しいです」

「私の親はクリーニング店を経営して、生活はお世辞にも楽じゃなかった。私自身、忙しい時はバイトを三つも掛け持ちしていた」

「当時とは時代が違います」

「ああ、解っているとも。私だって同情するさ。」

U C L A の優秀学生なのに、不況のせいで親は失職。本人は学費が尽きて、南海の小島で中国人相手のガイドの真似事^{まねごと}とは、アメリカもお終いだな」

「彼女しかいないからリクエストしたわけじゃありません。優秀だから推薦^{すいせん}しました」

「それは良いが、もし君が考えるような事態が進行中なら、彼女の身の上にも危険が及ぶことになるぞ」

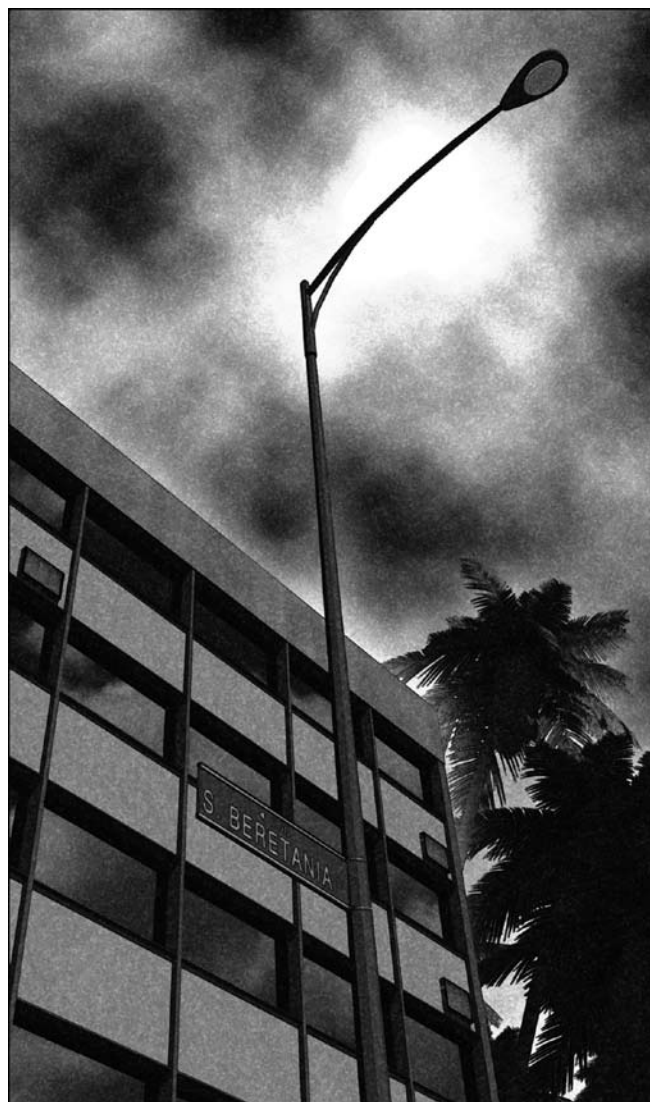
「慈善事業じゃありませんから、その辺りはドライにならないと」

「もし本人が拒否したら？」

「说得^{えき}します。それなりの餌^{えさ}をちらつかせて。もちろん危険も伴うと言うことは、最小限の説明に留めて」

キムは、少し皮肉げな笑みを浮かべた。

「君という男が時々解らなくなるよ。およそん



な組織には似つかわしくないモラルの持ち主のように見えて、時々、ドライな態度を見せる」

「組織が望む仕事をしているだけのことですよ。

私はそれでサラリーを得ている」

「お互いにな。最初はパートタイムということになるが、それで良いかね？」

「はい。でも、彼女がこの任務を無事にやり遂げてくれれば、将来的に大きな戦力になります」

「君が直接出向く？ スカウトに関する初期講座は受けてたっけ？」

「はい。五年前、セキュリティ・ランクのアップに伴う義務講座として受けました。私が直接出向いた方が良いでしょう。信頼関係を築くためにも」

「解った。メアリーに切符を用意させる。まあ、しばらくゆつくりしてくれば良い。本当に何かあると思うか？」

「恐らく。これは、たぶん大きな計画のほんの足がかりに過ぎないでしょう。全体像を突き止めないと」

キムは、珍しく深刻な表情を見せた。

「……もし、君が考えるような事態が進行しているとしたら、ここが最前線になる。われわれが防波堤になるしかない。食い止められれば良いがさらに忙しくなるぞ。センターからの介入も増えるだろうし。支局との関係もある。毎月、抜き打ちのポリグラフ検査も覚悟しなきゃならん」

マグヌスは、了解しているという顔で頷いた。キムが部屋を出ていくと、マグヌスは、ぼんやりと窓の外を見遣る。パームツリーの緑が眩しい。

HHRIは、表向きは研究所だが、論文の類を発表しているわけではなく、企業からの調査依頼に応じてマーケット開拓のリサーチをしていることになっていた。実際にその手の依頼を受けるこ

とはあったが、それは民間の調査研究所に丸投げしてレポートだけを相手に渡す。

研究所の名前は、CIAの表看板を隠すためのカムフラージュだった。CIAが全国全世界に有する支局の一つだ。だが、CIAハワイ支局というわけではなく、彼らはハワイ支局からは独立していた。

ハワイから西エリアの、主にミクロネシア周辺の監視活動がその任務だった。アルカイダの浸透を防ぎ、アメリカの信託統治から独立した、ミクロネシア連邦の離反の芽を摘むのも仕事の一部だ。不穏な動きがある……。分析官であるマグヌスは、この数年間、ミクロネシア連邦と、その周辺の島々で静かに起こっている事態を観察していた。彼のアンテナが反応していたのだ。

だが、分析は手探り、暗中模索状況だった。南洋の島々は、彼にとっては異文化そのもので、観

光客に対しては開放的だが、それは島のほんの一面に過ぎない。その水面下で、大きなうねりが起こっている。

パンドラの箱が開こうとしている……。マグヌスは、そう感じていた。

第一章 パラダイス

サンフランシスコのチャイナタウンに本社を置くチャイナ・パシフィック・トラベル社は、正社員一〇人にも満たない小さな会社だ。

自分たちで旅行を企画することはほとんどない。中国本土の旅行会社から持ち込まれる案件の、ビザ処理や通訳の手配が仕事の七割を占める。

会社のコントロール下で、つねに数十名の通訳兼ガイドが、西海岸からフィリピン、ベトナムなど東南アジアに掛けて活動していた。

常時、全体で何名の観光客が動いているか、誰も把握していなかった。千人か二千人か、日々殺到する業務をこなすのが精一杯で、なかには、メ

ールのやりとりだけで、一度も会社に顔を出したことがないガイド兼通訳もいた。

中国名、夏妃。^{シェイフエイ}フエイ・シエアの名刺を持ち歩く彼女もそんな一人で、一度も会社に顔を出したことはなかった。

採用は、人を介して。報酬は歩合給。最初は、南洋へのテンポラリーな観光ガイドだったが、ツアーが定着するにつれ、飛行機代が勿体無いと会社判断し、現地オフィス兼ガイドのアパートを確保して定住するようになった。

フエイ・シエアは、この島に赴任して半年になる。彼女は、通訳やガイドだけでなく、今では市

場開拓の仕事も任されていた。レストランを周り、中文のメニューを指導したり、時には味見もしたり、リゾート・ホテルで、北京語講座を開くまでにこぎ着ける。

たった半年で彼女は大きな仕事を成し遂げた。地元の経済界政界からも、その仕事ぶりは大きく評価されていたし、彼女が赴任する前年と比較し、島を訪れる中国人観光客は、倍に増えていた。

最初、仕事を始めた時は、歩合制に不安を抱いていたが、彼女は、会社にインセンティブをしっかり払わせるシステムも提案して成功していた。今では、トラベル・プランナーと名刺に刷り、地元の観光協会からは顧問料も受け取っていた。

南洋の小島で一生を終えるつもりはなかったが、今は仕事に満足していたし、男が欲しいとも思わない。

いずれ、銀のスプーンを咥^{くわ}えて生まれてきた連

中を見返す日が来る。自分と違い、たいした苦勞も無くキャンパスに通い、無事に卒業した連中を見返す日が来ると信じていた。

自分自身まだ二七歳だと言うのに、男性客に言い寄られた添乗員を慰めるのも板に付いてきた。リゾート・ホテルの一室にあるオフィス兼自室は、彼女らの駆け込み部屋だ。

マリア・リーは、彼女よりほんの二つ若いだけなのに、こっちへ来る度に、毎晩のように駆け込んでくる。まるでDV被害者のシェルターか何かのようだった。

「涙を拭いて、マリア。今回は何があったの？」と、シアアは、机の向こうからティッシュの箱を差し出す。

「具合が悪いと聞いて、ドアを開けたら、いきなり押し倒されて、『いくらだ？』ですよ。六〇歳過ぎの、頭の剥げた親父から」

「そりゃ、私と違つて貴方は美人だし。むしろ口説かない方がおかしいわよ。いくら出すって言われたの？」

「二千ドル出すって……」

「二千ドル?! 勿体無い……。貴方ひと月フルタイムで働いたって、それだけ貰えないでしょう。

あたしなんて太めで容姿も難ありだから、一度も誘われたことなんて無かつたわよ」

「どうすれば良いんです?」

「とにかく、そういう男には笑顔を見せないことよ。彼らには時間が無いんだから、口説いても脈無しと解つたら、どこかで街娼でも拾うわよ」

「でも、まだ三日も付き合わなきゃならない」

「どこかで貴方のツアーとすれ違うことがあったら、私がそれとなく注意しましょう。こんなこと言つては何だけど、貴方にはこの仕事は向いてないかもしれないわよ。貴方はガイドとして申し分

無く優秀だけど。観光客は、綺麗なガイドを見物しに来るんじゃない、あの公害で曇つた北京や上海から、南国の自然を求めて飛行機に乗るのよ。ドル札を抱えて。それが、自然より綺麗な貴方みたいな若い娘と四六時中一緒にいるとなると観光どころじゃなくなるでしょう」

「あたし、クビですか?!」

「とんでもない。私にそんな権限は無いわよ。ただ、ガイドをしていても、貴方のキャリアアップには繋がらないと言っているの。貴方の才能と美貌なら、もっとクリエイティブな仕事に就けるでしょう。ガイドは、貯金するためのショートのアルバイトと割切つた方が良いわよ。何事も向き不向きはあるし。口説いてくる客をあしらうのは、ガイドに求められる最低限のスキルです」

「どうして先輩はそんなに強いんですか?」

「私は四年間もROTCに通つて訓練したのに、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。